

消費社会が喚起する歴史の二相について

ある商家町の生きられた経験から

Instrument and Experience: Doubleness of Local History in Consumer Society

日本学術振興会 平井 太郎

1. 現代都市における歴史の喚起

現在、消費社会の浸透にともない場所の同一性が揺らいでいる。同時ににもかかわらず、場所の歴史が喚起される evoking of history 局面も少なくない。東京などでの都市開発では、年月を経た建造物や環境の取扱いが焦点になる例が増えつつある。それらの保存や再生を望む社会的な運動が高まるばかりでなく、開発資本の側も戦略的にそのモメントを取り込もうとしている¹⁾。あるいは地方のまちづくりにおいても、町が刻んできた歴史そのものが、町の経済的な将来性の資源として位置づけられつつある。こうした社会的な現象は、現代の消費社会と明示的にせよ暗示的にせよ、何らかのかたちで関係をもっている。歴史は場所にとって、その同一性の担保となるはずである。むしろそうした同一性を相対化するはずの消費社会のもとでも、その歴史が喚起されているのである。

現代都市や建築における歴史の喚起についてはすでに Ch. Boyer の労作³⁾がある。W. Benjamin の議論をふまえて、そこで焦点が当てられたのは、国民国家と産業社会という二つのモメントを通じて、十九世紀以降歴史が、たえず道具化 instrumentalisation されてきた様相である。さらに Boyer などの考察を受け継いだ M. Crinson⁴⁾ は、世界的な広がりを見せる歴史や記憶の喚起を、消費社会とグローバリゼーションに沿って議論を整理している。

まづ消費社会の論理によって、環境の変化が加速されているという。たんに物理的な変化が促されるだけではない。消費社会に特有のモードの論理によって、物理的には古びていなくても、消費社会に順応した意識のレベルでは陳腐化される場合がある。つい最近再開されたエリアでさえ、メディアで言及される機会が減るにつれ流行遅れの感が漂う。

Crinson はもうひとつ、グローバリゼーションにともなう人の移動あるいは移住による効果もとりあげる。日本でも産業構造の転換によって遺棄された施設や街区が、「産業遺産」として価値づけられつ

つある。また近年問題となっている商店街の空洞化でも、町の印象こそがまづ一変している。環境そのものは20年来変わらずとも、住む人も行き交う人も稀になったためである。こうした「人の移動」もまた消費社会の論理と関わっている。場所の印象は、観察者のみならず生活の場とする者を含めて、印象を抱く者が内在化させた、モードの論理と関係しているからである。

ここでは Crinson の示した論点を深めるために、二つの問題を提起する。第一に、消費社会の論理と歴史の喚起との論理的な関係である。「場所の変容が歴史を喚起する」という命題は、論理関係がかならずしも明らかでない。ここでは作業仮説として、消費社会の論理との対抗・順応関係のかたちで整理を試みる。

第二の問題は、それではなぜ「喚起」という曖昧な概念が用いられたのかという論点である。喚起を順応や対抗といった論理関係として特定すると、歴史があたかも合目的性にしたがった記号であるかのように見えてくる。それは印象を抱く当事者の主体性を前提とした見方にすぎない。消費社会で問題にされる記号化とは、主体による操作可能性に還元されない水準も視野に入れる必要がある⁵⁾。そしてだからこそ「喚起」という、解釈の幅を許容する概念が用いられたのであろう。

しかしながら、合目的性や操作可能性が相対化される局面は、消費社会という現実には曝されたときだけではない。当事者たちの意図、さらに記憶さえも越えた出来事、言わば「記号化しえない歴史」にふれたときにも立ち現われるのではあるまいか。

そこで注目されるのが、Benjaminの「経験と歴史記述」をめぐる議論²⁾である。Boyerはその含意を十九世紀以降の産業社会に限定したが、Benjaminの射程は受難史と自然史に及んでいる。ここでは当事者の意図や記憶を超えた水準に、場所の歴史が現われる出来事を発見し、かつその含意を検証することによって、Benjaminの射程をある程度咀嚼したい。

2. 商家町の現在 消費社会の文脈における歴史本論が経験的事実として参照するのは、神奈川県小田原市にある「小田原銀座」(図1)という商家町である。小田原駅から徒歩5分ほどの、買回り品を中心とする商店街で、あわせて大小約100の商店が軒を連ねている。近世以前から続く北部の須藤町と、1882(明治15)年に切り開かれた南部の緑新道とをあわせた、沿道400mほどの両側町である。

報告者はこの町内で約40名から、それぞれの店と家族の生活史調査を2003年から2年間行なった⁶⁾。また商店街(ほぼ全100店加入)・自治会(約60世帯加入)双方の活動を、2002年から断続的に参与観察している。両者からインフォーマントの紹介や研究報告会開催などの便宜を得た。



図1 小田原銀座の位置

(1) 環境変化に落ちるモードの論理の陰

小田原銀座でも1990年代以降、大型店やマンションへの建て替えが進み、町の環境は変貌を遂げつつある。他方で、市街地全般が中心市街地の衰退に喘いでいるにもかかわらず、市内で唯一200億円程度の売上げを安定的に確保している。これは標準的な駅ビルや郊外型SCと同じ水準である。

この背景には、売り場面積1万㎡程度の二つの大

型店の存在がある。町内きっての二つの大店が、それぞれ70年代と90年代に建設したものである。商店街の売上げが安定しているのも、この大型店の存在が大きい。またマンションへの建て替えが進んだことで、住民数も70年代以降で約1割減少したのにとどまっている。自治会も形骸化しておらず、また最寄品の需要も新たに見込まれている。

しかし大型店を含め新装された店舗は、モードの論理によって次々と陳腐化し、逆に歴史を刻んだ建物が注目されはじめている。たとえば紙茶商E屋E家(図1-1)の築70年の出桁造の店は、パブルで大型店への建て替えが頓挫したために残されたものである。それが近年復元的に改修され、新たな商業中心に生まれ変わっている。その隣地には、築120年の酒蔵を移築する計画さえ議論されつつある。

環境の変化と歴史の喚起について、消費社会の論理との関係を考えてみる。まづ小田原銀座で特徴的なのは、高度経済成長期から環境変化が急速に進んだことである。建物は不燃化・高層化し、敷地も統合や駐車場化を繰り返していった。

その典型が近世から続く薬種商K屋Y家(図1-2)に見られる。一千坪以上の店屋敷を誇った累代の老舗である。しかし戦時統制によって製薬部門を手放し、戦後の混乱期に地元金融機関の整理を引き受けたことなどから、高度経済成長期には経営が行き詰まっていた。そこで町内の求めに応じてまづ、屋敷部分を平屋建ての共同店舗(「仲見世」)と共同駐車場に開放した。さらに近郷近在の銅がなくなったとまで言われた総銅板葺の店も、町内に進出したがっていた銀行の求めに応じて、4階建てのビルに建て替えた。そして80年代には、向かいのE屋と共同で大型店への再開発を主導することになる。パブル崩壊でE屋は脱落したが、K屋は単独で従来の共同店舗と駐車場の敷地に大型店を新築した。

こうしたプロセスは、高度経済成長に端的に現われる、合目的な大規模化・効率化だけに還元されない。そこには消費社会におけるモードの論理も作用している。なぜなら経営的には順調だった共同店舗を、あえて大型店に建て替えているからである。皮肉にもモードは転回し、今になってK屋の仲見世に惜しむ声が絶えない。ここで注意すべきは、E屋の出桁造に対する注目も、失われたK屋の仲見世に対する価値づけと水準を共有する点である。どちらも暗にノスタルジーの商品として評価されている。小田原銀座でもまた、場所の歴史が価値づけられよう

としているが、その根柢には消費社会のモードが横たわっているのである。

(2) 世代というイメージの背後 町内の歴史をめぐるフィクションリティ

小田原銀座は老舗の多い歴史ある町だと言われることが多い。そしてそれが経済的価値だとさえ見なされつつある。しかしこの商家町の同一性は度重なる人の移動、またそれともなう生の様式の変化によって、現実には揺らいでいるのである。

たとえば関東大震災以前から家系や家業を保つ店は1割にも満たない。日露戦後の産業化は商品の転換や市場の全国規模化、さらに恐慌の続発をもたらした。いわゆる老舗は近世来の資産をそのたびに放出していった。そのため関東大震災前後、店や家系が入れ替わった例が多いのである。新しく進出したのは、郊外農村の二三男が多かった。彼らは洋服仕立などの職人あるいは玩具卸などの商人として修業を積んでいた。また第二次大戦では、町内からも出征者・戦死者が出、また戦時統制によって転廃業を余儀なくされた。逆に戦後創業の店では、闇市的な古着・古物商から進出してきた例が少なくない。

こうした断絶の歴史は町内でも意識されている。端的に現われるのは「世代」の存在である。度々の断絶は世代の偏りを生じさせてきた。皮肉なのは、この世代の存在によって、町内組織が度重なる危機を乗り越えたように見えることである。世代が偏っていると、組織が硬直化したとき、新旧世代の交代が劇的に進む。たとえば高度経済成長期、それまでの自治会に代わり、商店会が町内の最高意志決定機関になった。自治会を長老たちの組織として棚上げし、商店会を40代で固めたのである。同じ現象は90年代末、商店会が沈滞化した際にも現われた。50代の女将と30歳前後の若旦那、それぞれを中心とする組織が、今度は自治会内に結成されたのである。

言わば世代の存在が、この商家町の連続性や同一性と深く関わっているのである。しかしこの世代の存在自体、消費社会と関係していないのか、あるいはそのイメージにすぎないのではないのか、そう疑ってみる必要がある。最後の断絶だった敗戦から半世紀も経て、なぜいまだ世代のリアリティが鞏固なのか。この間世代のズレを生む断絶は訪れなかったのか、逆にその断絶がなぜ顕在化しないのか。調査を進めるとそこには、家業の家産化と家業の企業化という、二つの機制が浮かび上がってきた。

家業の家産化から経験的事実に即して説明する。3代目の妻が女将さん会の中核を担った、O屋A家(図1-3)がある。1893年に創業した洋服鞆取商の草分けである。O屋では2代目が、ニューギニア戦線で戦死したため小売に特化し、戦後は1代目妻と2代目妻とが店を切り盛りしていった。その危機を救ったのが高度経済成長、モノを置いておけば売れると回顧される状況だった。さらに小売もオイルショック以降長い不況に喘ぐ。だがそれも、現在の3代目への代替わり(1969年)の際、店を貸しビルに建て替え、危機を脱する。店は家業の場よりも家産としての比重を高めていったのである。O屋は2度断絶の危機をくぐり抜けた。それは家業がその実質を失い、さらに家産に変貌したことによって、断絶が回避される軌跡である。こうした機制にしたがった例は、この商家町のおよそ8割にのぼる。

他方、少数ではあるが家業を企業化させた店もある。たとえば3代目が若旦那衆の求心力となっているI屋I家(図1-4)である。その創業は戦後、折からの闇商売の隆盛をみて、町内のE屋から奉公年季半ばで独立したことによる。30坪の店で文具などを扱いはじめたのである。高度経済成長期、I屋もビル化を図り商売を拡張したが失敗する。オイルショック以降は事務用品卸売業に転換し、拠点も郊外の卸売団地に移して現在に至る。旧の店は経営から離脱した、3代目の兄の住まいとして残る。I屋の場合には戦後の混乱期に独立したため、家産に転換するに足る土地がなかったが、企業化によって店の断絶が避けられたのである。

しかしながら家業の家産化・企業化の双方のプロセスで、消費社会の論理は人びとの生の様式に浸透している。生業と生活の場として価値の準拠点であった町内も、相対化を余儀なくされつつある。

実際、家業の家産化では、家産を管理・継承する家族の論理が前面に出てきている。町内からみればそれは、一家族への利害の内閉である。その傾向はO屋の場合、サラリーマンとして横浜に在勤在住する4代目をめぐって、現在あらためて表面化してきている。4代目自身は家業に関心を示しているという。だが両親である3代目はそれを押しとどめ、活気のない下駄履きビルをそのままにしている。家業の論理にしたがえば、借金をしてでも経営を挺入れすべきであろう。しかし家産の論理からみるとそれは、徒な不安定要因として排除されるのである。

他方、家業の企業化の場合、事業拠点が町内から

失われ、人びとの関係性の軸は家業から「家庭」に移りつつある。たとえば自他ともに認めるように、

K屋の3代目が若旦那衆をまとめられるのも、経営者としての成功というより幼少期の記憶に支えられている。それは子ども会などの、店というより家庭とつよく結びついた記憶である。同時に、彼が自らの家庭を町内の外にもったときこそ、若旦那衆の結束の危機だとも自覚されている。彼の新しい家族と町内の人びとは、かならずしも有縁でないからである。家業の企業化は、長期的には人そのものも町内から遠心させるモメントとして働くと言える。

世代による人的結合が鞏固なのは確かである。またそれが町内の歴史を、連続的なものとしてイメージさせる担保にもなっている。だが世代の存在は、震災と戦災の二度の断絶だけでなく、家業の家産化と企業化によって、新たな断絶を回避したからこそ持続しえていたのである。この二つの機制が、「家庭」を価値の参照項としていった、戦後日本の消費社会の軌跡と重なりあうことは言うまでもない。

同時に家産化と企業化は、当事者たちのリアリティを、町内に対してそれぞれ内閉、遠心する力として働く。その意味で歴史ある町というイメージも、この相反する力の均衡のうえに成立しているのである。この町に根づく世代のリアリティは、消費社会にともなう流動化に対抗して、町内を維持しつづける切札と考えられていた。しかし世代そして町内というイメージさえも、消費社会に順応した生の様式と無縁ではなかったのである。

(3) 消費社会における歴史の閉塞

小田原銀座では、環境の変化においても人と生の変化においても、消費社会に対抗する歴史が意識されていた。だが生活史を掘り下げれば実のところ、それらはいずれも消費社会と順応してきた過程の産物だったことに気づかされる。

環境の変化のはてに今、建物や町そのものの歴史の活用が注目されはじめている。それはこの商家町を生き残らせる有効な戦略かもしれない。だが町と有縁のない酒蔵の移築が検討され、大型店こそが町の安定化に寄与してきた事実が無視されるなど、そこでの歴史は恣意的な改編が許されるものにすぎない。そしてその「恣意」は、町の人びとの意図というよりも、消費社会の匿名な不特定多数の欲望にほかならない。その欲望に準拠することは、自らの歴史を参照しているにもかかわらず、現実にはどこに

でもある「歴史の町」という「商品」に変貌することである。そしてモードが一回りすれば、たちまち遺棄される可能性に、身を置くことでもある。

しかもこの商家町では、歴史の連続性のイメージそのものが、消費社会の効果としてあった。それは世代というイメージを通じて、人的な結合をめぐる人びとの切実なリアリティと深く関係している。本論でとりだした機制は、戦後日本を通過してきた多くの場所で見られることであろう。問題は、町を廃墟に化しかねない消費社会の論理が、町や人びとにとって外的な力ではないことである。それが外力であれば対抗の余地もある。そうした対抗の政治や闘争さえ成り立ちにくくする点に、消費社会をめぐる閉塞が存在するのである。

3. 「記号化しえない歴史」の発現

2005年春、商店街にひとつの動きがあった。県立商業高校の教育プログラムの一環として、店舗経営の実習の場を提供してもらえないかという依頼が舞い込んだのである。ちょうど70年代に代替わりした世代の引退で、転廃業が現われてきた時期でもあった。商店街では空き店舗対策の補助金を用いて、商業高校に協力することになった。

賃料の関係から選ばれたのは、旧電器店の店舗付住宅だった。戦後、隣の町内に続く老舗呉服店の次男が創業したものの、実子がなく閉店したばかりの店だった。20年前に改築もされ、歴史的な価値を感じさせない。その意味では、商店街の「歴史」を商品化する戦略からは逸脱した試みではあった。

しかし新しい「高校生ショップ」(図1-5)の経営は、順調に推移していった。週3回しかも放課後だけという営業ながら、月商100万円を超えた月さえあった。そこにはまづ学校側の工夫があった。たとえば実業系の高校のネットワークをいかし、店舗の内外装を地元の工業高校の有志に依頼したり、全国の実業系高校から実習での製作品を取り寄せたりしたのである。また商店街も積極的に協力した。POSシステム付のレジスターを寄付して顧客管理に活用させたり、簿記の付け方を教えたりと、熱心に高校生を支援していったのである。なぜ商店街がここまで協力するのか。実は商店街の半数以上の店で、この商業高校の卒業生を抱えていたのである。

さらに調べると興味ぶかい事実突き当たった。

「小田原実業奨励会」という私塾の存在である。1909(明治42)年、先のK屋の13代目がこの私塾を創

立・主宰した。二十世紀初頭、老舗の没落が目立った時期、自家のみならず町内を中心に、界隈の店員そして奉公人出身の新しい店主たちを集め、簿記の習得から立志伝の講読などを行なったのである。

この私塾を母体として4年後には、町内の店主・店員による「自疆会」も結成された。そこでは座学だけでなく、会員の発意でさまざまな実践がなされた。たとえば震災後、道路が拡幅された商店街に青桐の並木を植えたり、近郷での火災の際に火事見舞いとして、町内の店名を染め抜いた手拭を届けたりしたという。私塾と自疆会でのこうした学習や実践が、震災前後の店、さらに町そのものの危機を救ったことは言うまでもない。それまでは小田原でも二番店、三番店の集まりだったこの町を、1930年代に名実ともに「銀座」にまで押し上げたのは、私塾と自疆会の存在抜きにしては考えられない。私塾はその後、1927（昭和2）年には私立小田原商業学校に発展し、戦時下の学校統廃合で公立化されたのち戦後、県立商業高校に改組されていった。

つまり震災前後に生まれた私塾の系譜が、約百年年の時を経て、今また町内に現われたわけである。この歴史的な符合は、当事者たちにはまったく自覚されていない。またモードの論理というには、その商品も外観も独特の時間にしたがっている。商品は教育プログラムに則っているし、そうと言われなければ気づかない店構えである。その意味で高校生ショップは、合目的でも操作可能でもない歴史の、不意に現在に立ち現れた断片である。それは記号化という消費社会の論理から距離をとった歴史、つまり言えば「記号化しえない歴史」にほかならない。

しかし早くも県や国は、この成功にモデル＝記号性を見出し、表彰したり視察を促したりしている。そのプロセスで教育効果や活性化といった意味づけが、高校生ショップと町内の有縁性に言及しながら事後的に強化されつつある。さらにモデル事業として平板化＝記号化され、同種の試みが全国に広まったがために、限られた実習品をめぐる争奪が始まっている。言わばふたたび主体や組織の目的に回収されようとしているのである。

高校生ショップをあえて百年前の私塾と関係づけるとき、この町の軌跡はむしろ断絶としての歴史として浮かび上がってくる。なぜなら問題の私塾は、この商家町が経験した、店や家族を根こそぎ揺るがす危機の渦中から生起してきたからである。その意味で「記号化しえない歴史」とは、店や家族さらに

場所にとっても、その連続性や同一性を担保するものではない。たしかに二十世紀初頭にこの町を揺るがした危機は、直接には産業化によるものに違いない。しかし消費社会変容の場合、たんに店や家族として場所の同一性を揺るがせるのではない。2.で明らかにしたのは、むしろそうした同一性があるかのように効果を及ぼす機制である。言わば消費社会においては、連続的な歴史のイメージそのものが構成され、さらにそのイメージが商品あるいは記号として消費されるという、自己準拠的な機制が働いているのである。

これに対して、私塾と高校生ショップを結ぶ歴史は、むしろ断絶を想起させる。現に私塾の存在はほぼ完全に忘れられていた。青桐の並木は1963年にはアーケードに置き換えられ、自疆会は自治会と商店会の狭間に埋没した。だが逆に同一性や連続性に回収しえない歴史こそ、今この町に不可欠なのではあるまいか。なぜなら変化の歴史に、また高校生ショップにその刻印として意味があるとすれば、消費社会におけるもうひとつの歴史の存在を、信憑させる根拠になりうるからである。

4. 「記号化しえない歴史」を捉える方法

場所の変容は現在、消費社会と対抗であれ順応であれ、その論理と無関係な歴史を発見することは難しくなっている。たとえば1980年代のアメリカ社会における共同性を分析したR. Bellahら⁷⁾もまた、消費社会の浸透を視野に収めていた。ライフスタイルやリアリティを共有する者たちの結びつきが全球化していたからである。ただBellahらはそのうえで、歴史的に継承された、宗教による結合と市民社会の結合とが、根強く残っている事実を強調した。そしてそれらを「記憶の共同体」と名づけ、たとえその結合がライフスタイルやリアリティを反映し、消費社会の論理に順応したものだとしても、積極的に捉える視角を提示したのである。この文脈でいえば、「世代のリアリティの持続」などの本論前半で分析した事例は、リアリティあるいはライフスタイルのバランスが生み出した、「仮想的な記憶の共同体」と捉え返すことができよう。

しかし「変容してもなお」という留保付きの理解は、消費社会の論理を第一義とした消極的な立論にとどまる。それに対して本論の3.でとりだした経験的事実は、消費社会の論理と二つの意味で距離をとらうる可能性が開かれている。ひとつは環境の変

化を促すモード=消費社会の論理との、もうひとつが当事者主体のリアリティとの距離である。

このように整理すると、Benjaminの「経験と歴史記述」をめぐる議論との接点が生まれてくる。たとえば論文「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」では、同時代の Freud や Bergson の知覚や記憶をめぐる議論を引きながら、「大規模な産業化がもたらす不毛で眩惑的なショック体験」を捉える方法が考察されている。十九世紀末から人びとは、後の消費社会を先取りする、目まぐるしい変容の連続に感覚を刺激されていた。その目くるめく感覚自体が過去の経験として記憶されるとき、それまでとは異なる「歴史」意識が浮上してくる。Freud はそれを無意識と位置づけ、主体の不安と関連させたが、Benjaminは疑問を投げかける。そのような主体の同一性すら前提にしないのが、同時代の産業社会ではないのかと。この問いかけは現代の消費社会にも当然、敷衍することができる。

そのうえで主体性の前提を相対化しつつ、産業・消費社会という文脈からも距離をとる手がかりとして、Benjaminは「経験 Erfahrung」に着目する。それは「しばしば凶らずも堆積する記憶」であり、同時代の個人の生や集団を越えて受け継がれてゆく。その意味で組織の合目的性や主体の同一性とは次元を異にする。もっともそうした「経験」 Benjamin のいう自然への畏怖や習俗における教訓のリアリティは、産業・消費社会の浸透とともに失われつつある。逆にだからこそ、同時代の感覚と記憶の相を「経験」という枠組みから捉え返せれば、産業・消費社会という文脈から距離をとり、その文脈自体を歴史的に相対化する契機になりうる。

一連の考察で Benjamin が引証したのは Baudelaire の抒情詩などの文学であった。これに対して本論では、人びとの意図せざる実践の水準に、「経験」に通ずる現象を求めた。Benjaminは「経験」として捉え返された歴史の相として、自然現象や戦争などによる人間の死を例示した。そうした死は意味や目的を見出すことすらできないほどに、膨大でまた突然である。そのときこそ歴史は、ある目的性や人間の主体性とは異なる相を見せるのである。

小田原銀座という場所の歴史もまた、家業や家系あるいは町組織の連続性や同一性に、担保されたものではなかった。しかも消費社会それ自体の効果によって、個人や世代さらには場所の同一性が担保されさえしていたのである。こうした現象は、産業化

と消費社会変容を通過したすべての場所に見出すことができよう。現在、場所の歴史が喚起されるとしても、それは多く消費社会が眩惑的に喚起する歴史にすぎず、しかもそれを自覚しないままに肯定せざるをえない、ある種の閉塞が生じているのである。

しかし同時に、小田原銀座における出来事はもうひとつの視角を示唆していた。それは非連続的な歴史という相の可能性である。それは場所の歴史に目的性ばかりか、同一性さえ求めないときに現われる相 歴史に無自覚であるというよりも、積極的に言えば断絶を歴史の条件だと見晴らすときに見えてくる相である。おそらく恐慌と震災の連続に見舞われた二十世紀初頭、小田原銀座のK屋13代目も、そうした展望を抱いていたのではないか。店と町双方の同一性をあえて自ら揺るがすことによって、はじめて継起しうる何か「経験」を信じ、また賭けていたのではないか。

非連続の相で捉えるのは、歴史を否定することではない。むしろそれは、商品・記号化して確からしさを装う「歴史なるもの」を、批判的に切り分けるポジティブな視座に他ならない。そのような視線で場所の来歴を捉え返すとき、「凡庸」だとされる建物や風景、あるいはまた「普通」としか言いようのない生活を、特別な理由づけ抜きで肯定しうる、新たな可能性が開かれてくると思われるのである。

参考文献

- 1) 平井太郎「現代都市における歴史の露頭」関東都市学会年報第9号、関東都市学会(予定)、2007
- 2) Walter Benjamin "Illuminations" Pimlico, 1999 所収 'Storyteller' および 'On Some Motives of Baudelaire' を参照
- 3) Christine Boyer "The City of Collective Memory" MIT Press, 1996
- 4) Mark Crinson "Urban Memory" Routledge, 2005
- 5) 内田隆三『国土論』筑摩書房、2004の第一部第二章、第四部第一章を参照
- 6) 平井太郎他「住まいと商いの重層的複合による近隣商店街再生の方途」住宅総合研究財団研究年報第38集、住宅総合研究財団pp93-104、2006および平井太郎「銀座」百年」関東都市学会年報第8号、関東都市学会 pp88-97、2006を参照
- 7) Robert Bellah et. al. "Habits of Heart" University of California Press, 1996